

伊藤清蔵における農政学と農業経営研究

和泉庫四郎*

(昭和63年5月31日受付)

Agrarian Economics vs. Farm Management Studies in the Academic Life of Seizoh ITOH

Kurashiro Izumi*

Seizoh ITOH (1885-1941) was one of the most distinguished Japanese agricultural economists in the Meiji-Taisho era. Although he published only two books in his academic field, both of these had a strong influence on the young students of agricultural economics in those days.

His first book, *Agricultural Finance*, was originally prepared for his bachelor's thesis just before his graduation from Sapporo Agricultural College in 1900.

In 1903 ITOH went to Germany. He was there for three years studying farm management and agrarian economics in Bonn and Halle. He returned home in 1906 to become professor of agricultural economics at Morioka Agricultural College. He published his famous second book, *Farm Management*, in 1906. Just after the publication of this book, he resigned his post in Morioka and went to Argentina to start a giant farm business management project. He became a very successful and well-known farm business proprietor there. In 1939 ITOH gave a lecture concerning his successful farming at the Argentine University of Agriculture and Animal Husbandry.

はじめに

明治30年代後半から同30年代初めにかけて、佐藤昌介と新渡戸稲造の薫陶を受けた新進気鋭の学者——高岡熊雄(1871~1961年)と伊藤清蔵(1875~1941年)が、出発間もないわが国の農業経済学の教育・研究に参加した。二人はそれぞれ農政学と農業経営学の発展に大きな業績

を遺すのであるが、とりわけ伊藤清蔵の場合はわが国最初の『農業経営学』(丸山舎, 1909年初版)の著者として、いまなお数多くの研究者の間でその名を記憶されている。

高岡熊雄と伊藤清蔵の二人がそれぞれ札幌農学校を卒業したのは、明治28年(1895年)と同33年であった。したがってそのときから一世紀近く経過したいまの時点から当時を振り返ると、二人はほとんど同じ時期の卒業と

* 鳥取大学農学部農林総合科学科経営管理学講座

* *Department of Farm Business Management, the Faculty of Agriculture, Tottori University*

いっても差し支えないことになる。しかし伊藤の遺した3冊の著者——『農業金融論』（裳華房、1900年初版）『農業経営学』（上掲）『南米に農牧三十年』（宮越太陽堂、1956年初版）を読むと、高岡熊雄と彼との間に存在したわずか5年という卒業年次の開きが、その後の伊藤の生涯と学問の方向に決定的ともいえるほどの影響を与えたことが分かる。

それでは、高岡熊雄との間に存在した卒業年次の開きが伊藤に与えた決定的影響とは、一体、どのような形で彼の研究とその生涯に現れたのであろうか。

伊藤が遺した3冊の著書を検討することによってこの点を明らかにすることが、本稿の課題である。

農業金融論出版のころ

伊藤清蔵の出生は1875年(明治8年)。父^{やすし}豫は山形県新庄に住む貧乏士族。母順は、縁あって豫に嫁いだ、旧三河田原藩士の長女であった。清蔵の兄弟は彼を含めて9人(姉2人、弟3人、妹3人)。清蔵出生のころは、一家は専ら小学校教師をしていた父豫の収入で生計を立てていたが、その後は年毎に子供の数が増えたので、それだけでは家計を維持できず、豫は教師を辞めたかわり収入の不足を補うために、戸長や町役場の書記をしていた時期もあったという。

清蔵は1889年(明治22年)数え年15歳のとき新庄を離れ、山形県中学校に入学した。長男の清蔵には「士族にふさわしい教育を受ける必要がある」との、父豫の配慮によるものであった。しかし清蔵は3年後の1892年秋になると北海道に渡り、札幌農学校予科の3年級に進学した。進学先に札幌農学校を選んだのは、彼の自伝『南米に農牧三十年』によれば「一日も早く学業を終え、一円なりとも多くの収入を計り、一円なりとも失費を少なくして父を助け、弟と妹の教育に必要な学費の一部を支給する」ためであった。当時の札幌農学校は、植民地に創設された学校ということもあって、比較的整った奨学制度をもっていたから、そうした清蔵の意図にふさわしい進学先であった。

伊藤清蔵が札幌農学校予科の課程を修了して本科に入学したのは1896年(明治29年)。卒業は4年後の1900年7月。教授たちの多くが彼を「内村鑑三以来の秀才」(中島九郎『佐藤昌介』232頁参照)と評価していただけあって、卒業のときの成績は首席であった。

札幌農学校在学時代の伊藤清蔵の面影を伝えるものに、有島武郎の日記『観想録』(筑摩書房版『全集』第10巻収録)がある。

有島武郎は1896年に学習院中等科を卒業し、その年の秋、札幌農学校予科5年級に入学した。同じ年の秋に伊藤清蔵は上述のごとく予科を修了して本科に入っていたから、有島は伊藤の一年後輩だったことになる。以下の引用は予科5年級後期在学中の有島武郎の眼に映った〈敬愛する秀才伊藤清蔵〉の清新な姿を伝えている。

「我レ農学校ニ入学シテヨリ伊藤清蔵氏(本科1年)ニ遇フ毎ニ、何トハ恭謙ノ貴容ニ打タレ……同氏ニノミハ我モ礼ヲ為シニキ。後其該級ノ首席ニ在リト云フヲ聞キ、尊敬ノ念愈加ハリヌ……」(1900年4月3日)
「……伊藤清蔵氏散歩セズヤト余ヲ誘引セラル。丸山ニ至リ……相共ニ手ヲ携ヘテ登ル。快誠ニ窮リナシ。伊藤氏逸逸ノ詩ヲ詠ス。シラー^{ホフマン}ノ希望ノ詩ナリ。詠シ終リテ我ニ其意ヲ伝フル甚ダ切。嗚呼君一年級ノ学生トシテ詩ヲ暗記スルーニ此ノ如キニ至ルカハ、勉強ノ篤キニヨラズンバ焉ゾ此ニ至ラン。……此遊快実ニ窮リナシ」(1900年6月20日)

1903年(明治33年)10月に東京日本橋の裳華書房から出版された伊藤清蔵の『農業金融論』は、伊藤がその年の6月に直接の指導教官であった佐藤昌介校長に提出した卒業論文を印刷したもので、本文623頁。在学中から「内村鑑三以来の秀才」といわれて衆目を集めてきた、彼の真面目を示す文字どおりの大著であった。

伊藤の『農業金融論』は、彼が農学校を卒業する3、4年前に不動産銀行として発足した勸業、農工、北海道拓殖の三つの銀行の農業金融機関としての役割を、主としてヨーロッパの経験を参考にして、制度的に論述したものである。それら三つの銀行はいずれも農業を保護育成するために、先進国、とくにドイツに学んで、明治政府が積極的に介入して設立した銀行であった。しかし政府による設立の意図はどうであれ、三つの銀行は利潤の追求を目的とする株式会社であったから、日露戦争後の経済発展の過程のなかで農業金融に対する熱意を急速に失っていくのであるが、当時の農業関係者、なかんずく広大な未墾地の開拓を至上命令としていた北海道の農業関係者のこれから不動産銀行に対する期待は大きく、伊藤清蔵が在学していたころの札幌農学校では、校長兼教授の佐藤昌介が農業経済学の一環として「農業金融論」の講義を実施したり、卒業間もない新進の農政学助教授高岡熊雄が上京の折に大蔵省を訪ね、諸外国の農地・不動産銀行関係の資料と文献を集めたりしていた(伊藤『農業金融論』巻末収録の「文献解題」；高岡熊雄『時計台の鐘』等を参照)

北海道大学図書刊行会が10年ほど前に出版した複製版

『札幌農学校』（1898年初刷）の巻末には、この本の版元であった裳華房が「帝国学術界のため」に16冊の農学双書を出版する計画をもっていること。第1巻には新渡戸稲造『農業本論』を、第2巻に佐藤昌介『農業金融論』を、次いで南鷹次郎、松村松年などの著書を近々中に順を追って刊行すること。そして各巻の執筆についてはすでに「諸先生の許諾を得ている」との広告文が、2頁にわたって大きく掲載されている。

こうしたことから判断すると、伊藤清蔵の『農業金融論』は次のような経緯で出版された、と考えることができるだろう。

1) 『農業金融論』の執筆を引き受けたものの、校務に追われて約束を果せなかった佐藤昌介は、伊藤をピンチヒッターに仕立て、取りあえず、彼に同じ論題で卒業論文を書くことを勧めた。

2) その際、佐藤は彼自身の構想を伊藤に伝え、助言を惜しまず、かつ手持ちの全ての資料を提供することを約した。

3) 伊藤は佐藤の要請に応じて卒論を書き始めた。そして問題があれば、その都度、佐藤を訪ね、意見を交換した。

4) 卒論は完成し、佐藤に提出された。一読後、それが期待どおりの出来栄であることを確認した佐藤は、版元と交渉し、伊藤の卒論を伊藤の著書として出版するよう依頼した。

伊藤の卒業論文はこうしたプロセスを経て、卒業した年の10月に佐藤昌介校閲、伊藤清蔵著『農業金融論』として刊行され、彼の存在を一躍著名にしたのであるが、この時点までの伊藤は、出版元の裳華房がこの本の広告文の冒頭で派手に宣伝したように、〈農業経済学農政学専攻〉の新進気鋭の学者であった。

ところで明治から大正にかけて農業問題に関心をもつ人びとの間で、農政経済という用語が頻繁に使用されたことがある。英語のAgrarian EconomyないしAgrarian Economicsに対応する翻訳語であったが、原語そのものは、農業構造の制度的な遅れが顕著で、改革の必要が叫ばれている発展途上国では、いまでも経済学者の間で盛んに使われている。したがって伊藤の『農業金融論』の構成と狙い、そして彼のこの著作を生みだした明治農業の発展段階を考えるならば、当時の彼はまさに言葉どおりのアグラリアン・エコノミーの研究に励む、若き学究であった。

ドイツ留学時代

高岡熊雄のドイツ留学と相前後して札幌農学校を卒業した伊藤清蔵は、高岡がドイツへ出発すると、そのあとのポストを埋める形で、母校の助教授に採用された。助教授としての彼の仕事は農業経済学の講義・演習の一部を担当するかたわら、学校農場の経営に参画することであったが、2年半後の1903年1月になると、今度は彼が高岡熊雄の後を追う形で、官費留学生としてドイツへ留学した。「帰国後は新設の盛岡高等農林学校の教授として赴任する」というのが、そのとき学校側から彼に示された条件であった。

伊藤の自伝『南米に農牧三十年』によれば、校長の佐藤昌介からこの話しが持ち出されたとき、母校にとどまることを望んで一度は強く留学を辞退したが、佐藤に説得されてドイツへ出発した。伊藤が引続き母校にとどまることを望んだとしても、彼のための新しいポストが増設されない限り、高岡熊雄が留学から帰国して復職すれば、高岡に助教授のポストを明け渡して学外へ転出せざるをえない、という伊藤自身の学内における立場を考えた上で、やむをえず校長佐藤昌介の説得に応じたのであろう。したがって同じドイツ行きであっても、新渡戸稲造の後継者としての地位を保障され、祝福されながら出発した4歳年長の高岡の場合と異なり、伊藤の場合は悲喜こもごもの留学であった。

官費留学生としてドイツへ留学した伊藤清蔵に、文部省がどのような命令を与えたかについては、いまのところ不明である。北海道大学附属図書館北方資料室に、当時の校長から文部大臣宛に送られた「助教授伊藤清蔵をドイツへ留学派遣の儀具状」（1901年5月18日付）が保存されている。この上申書には、学校側が伊藤を海外留学派遣候補者として推薦する理由を以下のごとく記述しているに過ぎないから、文部省が伊藤に与えた課題も、恐らくは「農業経済学及び農政学研究のため留学を命ず」といった、極めておおらかなものであったに違いない。

「本人（助教授伊藤清蔵）ハ明治33年7月本校ヲ卒業シ同月本校助教授拝命爾來今日ニ至ル迄……能ク職務ニ精励シ……其成績凡ルヘキモノアリ教官トシテハ至極適任ト被認候条特ニ選抜ノ上農業経済学及農政学研究之為三箇年間独逸国留学被命候様度別紙履歴書学業成績及（本人ノ著書）農業金融論相添此段具状候也」（かっこ内は引用者の付記）

1903年1月、3か年の海外留学のため日本を出発した伊藤清蔵は、ドイツに到着すると、最初の1年をボン大

学の農科大学で過ごした。この大学の教授をしていたドイツ農学界の大立者フォン・デア・ゴルトツの講義に出席するためであった。ゴルトツは伊藤がボンに着いた年に農業経営学と農政学のほかに農業史の講義をやることになっていたから、「農業経済学及び農政学の研究」にドイツにきた伊藤にとって、ボンはまことに都合のいい大学であった。そしてそれらを一通り聴講すると、かつて新渡戸稲造がドイツ留学の一時期を過ごした東部のハレ大学に移り、1年ほどの間、クレール(H. Krahl)の農業経営学の講義に顔を出した。しかし、残念なことに、これら二つの大学で出席したゴルトツとクレールの講義は、どちらも若い伊藤清蔵を引きつけるほどの魅力をもたなかった。ゴルトツはかつては農業経営、農政、農業史など農業経済学の巾広い領域でパイオニア的業績を残した学者であったが、1836年生れの彼は当時すでに70歳近い高齢で、「物静かに教室に入ってきて、諸君^{マイ・ヘレン}といってから、満堂の聴衆に語る如き姿勢で講義を始める」のであったが、農政学の講義のごときは伊藤が聴講したときには、出席者は彼を含めてわずか4人。日本で人気のある農政学の講義はボンでは全く逆で、ゴルトツの容ぼうを特徴づけていた白髪が、あたかも農政学という学問の古さと時代遅れの象徴であるかのように感じられた。そしてハレで聴いたクレールの講義からも同じような印象を受けた、という。

こうしたことから伊藤の関心は、次第に農業経営学や農政学からそれらの「基礎科学である経済学の研究」とりわけ「農産物の世界的競争の実態」の調査研究へ指向するようになった。彼の留学していた時期のヨーロッパ農業はドイツを含めて、アメリカとロシアから入ってくる安い穀物によって恐慌のまっただ中にあったこと。さらに伊藤自身が回想しているように、当時のハレ大学には「経済学の派手な教授たちがいて、弁舌・論争・研究に活気盛んなものがあつた」ことなども、伊藤の関心を農政学と農業経営学の研究から農産物の国際競争の問題へ転換させた、大きな原因であった。

伊藤は日本から来ているということで絹糸の国際競争の問題について論文を書くことを思いつき、資料収集のためオランダとベルギーへ旅行したのち、最初の滞在地ボンに戻ってドイツ留学の最後の半年を送った。ボン大学の教授で「有名な自由主義経済学者H. ディーツェルに論文草稿の指導を受ける」ためであったが、論文は未完成のまま、留学の期間を終った。絹糸の主産地は東洋、とりわけはるかなる彼の故国日本であったから、伊藤がいかに秀才であっても、ボンには思うように資料を

入手できなかったからである。

ドイツ留学中に論文を完成できずに帰国したことに彼はよほど心を痛めたらしく、晩年になっても、あのとき論文の対象に「小麦を選ばなかったのは、一生の不覚であった」と悔んでいた。

盛岡高農教授時代、そしてアルゼンチンへ

1906年(明治39年)ドイツ留学を終えてアメリカ経由帰国した伊藤は、佐藤昌介の勧めに従って新設の盛岡高等農林学校へ赴任した。彼はアメリカではテキサスの稲作を見学したり、当時アメリカ留学中の有島武郎をワシントン郊外に訪ねたりしている。有島武郎が彼の両親宛に送った1906年5月13日付の手紙の一節に「文部省留学生として独逸にありし伊藤清蔵氏(小子よりも一年上級にありし秀才に御座候)来遊され、四日間同居致居候。同氏着京之上は小子の近状をもちまして上宅せられる事と存申上候」という記事があるから、この手紙の日付から逆算すると、伊藤が盛岡高農で講義を始めたのは、帰国した年の9月の新学期からであろう。

教員数の少ない当時の高等農林学校のことであるから、盛岡での伊藤は「農林経済に関する全ての講義を受け持つ」かたわら、附属農場長を兼務し、多忙そのものであった。しかし彼が盛岡で高農教授として生活したのは、3年後の1909年の夏まで。この間に伊藤は佐藤昌介の推薦で文部省から農学博士の学位を授与されたが、1909年の9月には、ボン滞在中に知り合ったドイツ人女性オルガ・ディーツ(Olga Dietz)と結婚するため、教授の職を辞め、シベリア鉄道経由ドイツに向った。二人の間で、挙式後はドイツからアルゼンチンへ直行し、そこで暮っていたオルガの親戚の遺産をもとに「大農場を経営する」ということが決められていたからである。したがって伊藤の盛岡滞在は極めて短期間だったということになるが、この間に彼は明治・大正・昭和前期の三代にわたって繰り返し読み続けられる名著『農業経営学』の原稿を書き上げ、出国直前に東京の丸山舎から出版した。彼は『農業経営学』を「日本を去るに際しての置土産」として一気書き上げたのであるが、そのときの彼の心情には、彼の師の一人新渡戸稲造が病を押して『農業本論』を書き上げてアメリカへ静養に出掛けたときのそれと、何かしら共通するものがある。

伊藤清蔵がアルゼンチンに去ってから22年後の1931年(昭和6年)に、かつてボン大学で伊藤と同じ教室でゴルトツの講義に出席していたテオドル・プリングマンの『農業経営経済学』の翻訳本が出版された。この翻訳本

は日本の農業経営研究者に大きな影響を与えるのであるが、訳者の大槻正男は訳書序文のなかで伊藤の業績に触れて、次のような見解を表明している。「ゴルツの農業経営学を移した功労者・伊藤清蔵博士はアルゼンチンに去ったが、わが国の農業経済学界はいまなおゴルツの時代に停迷している」と。

このときの大槻の指摘には確かに傾聴に値するものがある。しかし大槻の訳出したプリンクマンの原本が1922年の出版であることを考えれば、ドイツ留学直後に書かれた伊藤の『農業経営学』との間にアプローチの仕方その他にかなりの相異があるのは、むしろ当然であろう。

伊藤清蔵とプリンクマンの著書を比較する場合にさらに重要なことは、伊藤は彼の『経営学』を農業者のための経営管理の手引書と書いたのに対して、プリンクマンの著書は、当時のドイツ学界の流行であったマックス・ヴェーバ流の学風に従って、経済学の研究書として書かれている、ということである。二人の学者のアプローチの仕方の相違を現代風に表現するならば、伊藤が取り上げたのは文字どおりマネジメントの問題であり、プリンクマンが対象にしたのは主としてプロダクション・エコノミックスの問題であった、ということができよう。

伊藤の『農業経営学』にはゴルツの『^{ハンドブック}手引書』を踏襲したような説明が多い。しかし伊藤の最大の功績は、幾つかの作物を組み合わせて栽培しなければならない畑作地帯の土地利用の問題を農業経営研究の中心に据え、この問題に取り組みなければ、農家の直接の関心事である労働力利用の問題を解決できない、としたことである。彼が育ち、かつ学んだ東北・北海道の寒冷地畑作農業の根幹に触れる問題であったから、具体的な解決策を提示するには長期にわたる実際の経験が必要であった。彼の自伝『南米に農牧三十年』に附章の形で収録されているブエノス・アイレス農牧科大学における伊藤の講演記録「アルゼンチン農牧畜業のよりよき生産について」は、彼が盛岡高農教授時代に提起した問題に対する解答であり、同時に彼が故国日本に遺してきた『農業経営学』の完結編でもある。

講演では、伊藤が34歳のとき妻のオルガとアルゼンチンに渡航、以来25年余にわたってブエノス・アイレスから南へ300キロ離れた僻村ポリバルで経営してきた農場での経験と成果を説明し、第2の故郷アルゼンチン農業の在り方を論じたもので、総面積3,500ヘクタールの農地に長期輪作を確立して穀物・飼料生産を行い、肉牛7,500頭、綿羊3,200、豚1,000その他の家畜を飼養する収益性の高

い、安定した大農場を確立するまでの過程が、興味深く語られている。

伊藤が亡くなる2年前の1939年に彼を訪ねた宮城孝治氏（共栄火災前会長）は、伊藤が半生を共に過ごしたオルガ夫人と、直接、会話を交わした現存の人であるが、彼女が「もの静かな、典型的な西洋婦人であった」と伝えている。伊藤と彼女の交際は、彼がボン滞在中にたまたま同じ大学で文学を学んでいた彼女から、ドイツ語の指導を受けたとき以来のことであった。伊藤がボンでオルガに初めて会ったのは、ドイツ留学1年目の1903年。結婚したのは1909年。この間に伊藤は帰国し、3年間盛岡で教師生活をしているから、二人は長い交際と文通を通して互いの人柄と愛情を確認し合って挙式した、と考えてもよいであろう。伊藤はそうした過程を「最善の日本婦人と結婚しても、この人のように自分の気心を解してくれる人はいないのではあるまいか、と考えて結婚した」といつている。最晩年になってもこの考えは変化せず、オルガは伊藤の期待どおり「つましやかで、田園生活を好んだ」から、彼女との結婚は「成功であった」と、異郷で過した二人の生活を回想していた。

伊藤清蔵夫人の洗礼名オルガ(Olga)は、人によってはオリガ(Olga)とも表記され、語源的には「信仰心のあつい女」とか「清かで聖なる女」とかの意味をもち、これと大同小異の語意をもつエルザという洗礼名とともに、北ドイツからスカンジナビア、かつては帝政ロシアを含む東欧諸国にかけて広く使われていた名前であった(オックスフォード版『英語クリシチャン・ネーム辞典』参照)。そしてわれわれ日本人の間でも、かつて読んだり劇場で観たことのあるロシアの劇作家チェーホフの代表作の一つ『三人姉妹』の長女で主役の娘の名が「そういえば、オリガだった」と思い出す人の数は、決して少なくはないであろう。しかし、そうしたことはともかくとして、明治30年代から40年代に社会へ巣立った数ある農業経済学者のなかでひとときわ傑出した存在であった秀才伊藤清蔵を、この〈信仰あつい、聖なる〉ドイツ婦人が彼女の渡航先アルゼンチンへ連れ去ったことは、日本の農業経営研究の発展にとってかえすがえすも残念な出来ごとであった。

しかし伊藤はあのとき盛岡を離れなかったとしても、引き続き日本にとどまっていたであろうか。伊藤は、彼が学生のころに愛唱した詩のなかでシラーが歌っているような、『つねに良き将来の日を……語り、夢見てひたすらに走る人』であったから、〈希望〉の実現を目指して、いつの日か日本を出国していたに違いない。秀才伊藤清

蔵は若いときから、そういった種類の人だったのである。

文 献

- 1) 有島武郎：観想録（有島武郎全集第10巻、筑摩書房）東京，（1979）
- 2) 有島武郎：書簡集（有島武郎全集第13巻、筑摩書房）東京，（1980）
- 3) 伊藤清蔵：農業金融論。裳華房，東京，（1900）
- 4) 伊藤清蔵：農業経営学。丸山舎，東京，（1909）
- 5) 伊藤清蔵：南米に農牧三十年。宮越太陽堂，東京，（1964）
- 6) 高岡熊雄：時計台の鐘。楡書房，札幌，（1956）
- 7) 中島九郎：佐藤昌介。川崎書店，札幌，（1956）
- 8) 北大百年史刊行会：札幌学校史料第1巻，ぎょうせい，東京，（1980）